

中山間地域農村活性化とエコミュージアム

－鳥取県河原町をモデルとして－

(株)地域デザイン研究所

所長 吉 田 幹 男

はじめに

農林水産省では、中山間地の施策として本年度から中山間地域農村活性化総合整備事業「ふるさと・水と土保全対策事業」を打ち出した。これは、フランスのエコミュージアムとイギリスのグランドワークスをモデルにしたものである。従来の土地改良事業から一歩踏み出し、土地改良施設のほか、自然・文化・歴史・伝統工芸等地域資源のすべてを対象にした、言わばむら社会の改良事業といった施策である。

本計画は、わが国の重要課題の一つである中山間地域農村活性化の手法として、フランスの過疎地域で一応の成果を得ているエコミュージアムの考え方を援用し、鳥取県の河原町をモデルに、全町公園化事業とも関連して、具体的な展開方策を研究し、提案したものである。

1. エコミュージアムの考え方

エコミュージアムは、フランスで広められた考え方であり、フランスでは現在45の地域で整備されている。意識すると「生活・環境博物館」となり、「地域及び環境における人間の博物館」ということになり、言わば「地域の生活と産業の舞台」そのものを対象とした博物館といってよい。

対象となる地域の生活・生産環境をテーマに、地域の人々が培ってきた過去から現代までを学び、地域の未来を創造していくものである。

エコミュージアムの特徴は、一つの施設に集約するのではなく、地域の空間に分散した資源を生かして、地域をまるごと博物館と捉える点にある。

エコミュージアムは「時間と空間の博物館」と言ってよく、時間と空間が意味するものからつかみ取る必要がある。

<時間の博物館>

地域が形成されてきた過程、人々が培ってきた時代（自然環境、社会環境、産業環境等）をテーマとするもので、次の二つの施設から成る。

○地域の成り立ち（自然・文化・歴史・産業等）を総合的に学べる施設。

○失われてしまった地域の姿（自然・文化・民俗・建築・産業等）を再現し、記録の収集・公開を通じて再確認できる施設。

＜空間の博物館＞

地域の環境すべてを意味するものであり、次の施設から成る。

○地域に分散した自然・文化・歴史・産業及び地域に暮らす人々をも含めて、その遺産や資源を現地において表現し、公開する施設。

以上のように、エコミュージアムの対象地域は地域全体となるが、具体的な要素としては、次の3つから構成される。

●コアミュージアム（中核施設、博物館）

エコミュージアムの中核施設としてインフォメーションセンターとしての役割を果たし、地域の歴史・資源・遺産を概観できる機能を持ち、地域の研究・調査・学習を行っていく場。

●サテライトミュージアム（衛生博物館、園）

地域に残る歴史的遺産や、地域で培ってきた文化や産業、地域の自然等自然と人間との関係の上で築きあげられてきた“もの”を地域の「空間」の中で示していく、「空間の博物館」としての役割を発揮する場。

自然分野：山岳、河川、森林、動物、植物等

文化分野：町並み、城跡、考古遺跡、史跡、風俗、慣習等

産業分野：水田、畑、果樹園、牧場、人工林、生産工場等

●ディスカバリートレイル（発見の小径）

地域の自然、歴史、文化等サテライトミュージアムを構成する要素を発見し、観察・体験する小径で、エコミュージアム全体像をテーマ別に体験的に理解を深める重要な役割を果たす場。

2. 河原町におけるエコミュージアムの意義と考え方

鳥取県の全県公園化構想を受けて、河原町でも全町公園化事業に取り組むこととなり、その具体的な展開策に、エコミュージアムの手法を援用することを提案したものである。

エコミュージアムの、生活を取り巻くあらゆる環境を対象とした「改善・再生の運動」としての取り組みに着目し、ハードの事業もさることながら、住民のコミュニティぐるみの参加によるソフト面の事業に重点を置くこととした。

河原町におけるエコミュージアム導入の背景は次のとおりである。

<河原町の地域特性>

河原町を特徴づける自然の軸は川である。町の中心部を南北に貫く千代川本流とそれから西へ支流となって源流の三滝溪へとつらなる曳田川を骨格として、多くの支流や用水路が網の目のように縫い、特徴ある様々な表情を見せる。まさに“顔のある川の町”である。

そして、豊かな水を支える谷あいの田園地帯、変化ある丘陵地・山岳地帯の自然。このような自然が生み出す豊かな資源を背景に、河原町は古代因幡の国造りの発祥の地として栄えた。中世以降の水利・水運の発達も県下を通じて最も著しかった。

豊富な農林水産物を資源とする食品加工、染色、製薬、紙すき、木製品等様々な手工芸産業も発達した。

<エコミュージアム導入の背景全町公園化事業の意義>

以上のような河原町の豊かな自然資源と産業資源も、近代化の中で失われ、忘れられ、さらに過疎化の進行も重なって、衰退し、荒廃していく姿が見られる。

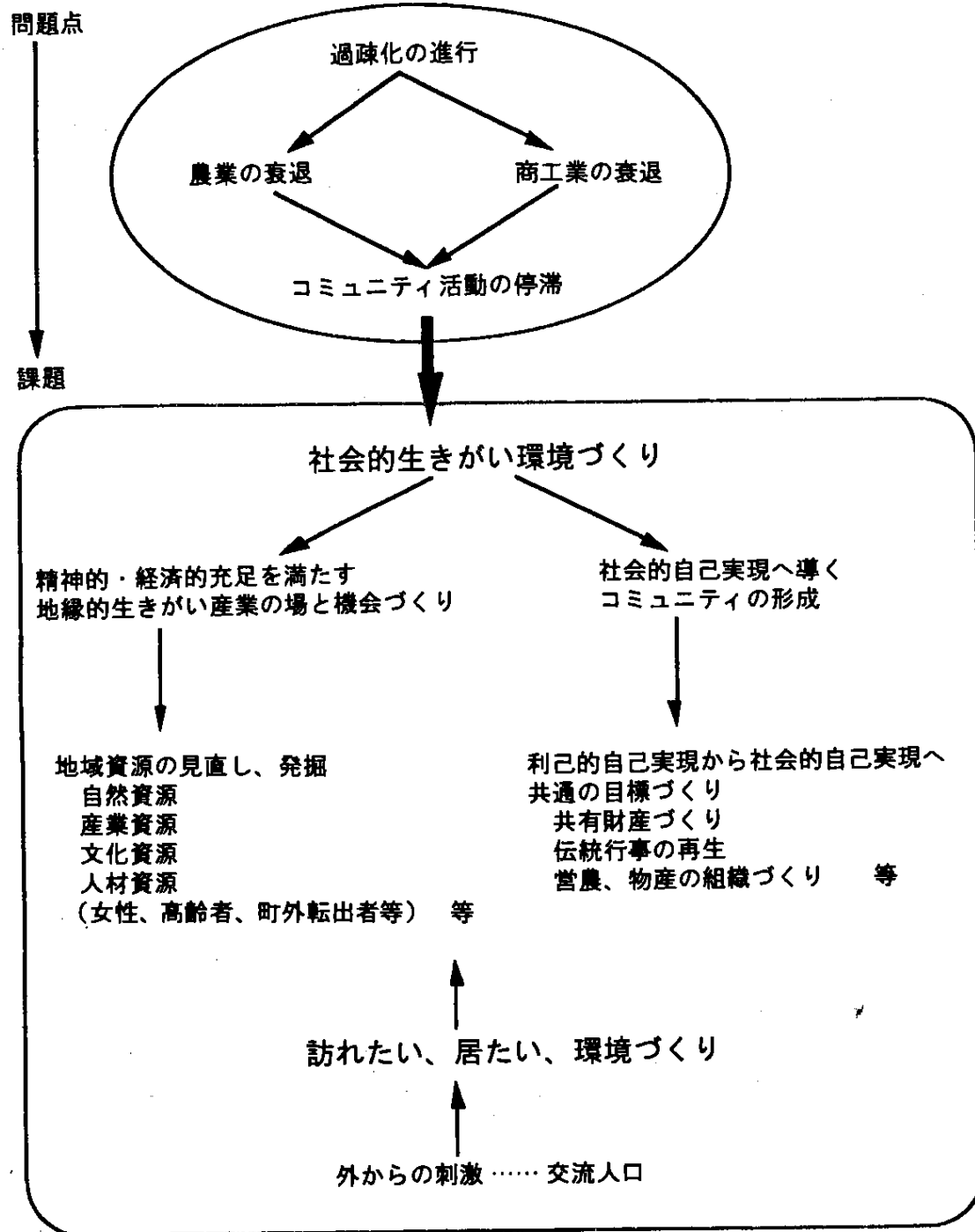
最近全国各地の中山間地の問題として、単に食料生産としての農業ではなく、国土保全の面から農業の維持、そのための定住化策が強調されるようになった。もはや山村に住まい農業振興だけでは困難になったことも現実としてある。

かつて山村がそうであったように、むらのコミュニティの豊かさ、生活・生産・環境保全を通じた社会的な生きがい感をいかに取り戻すかが重要になっているといえる。

河原町においても、農山村の人口定着を図り、かつての豊かさを取り戻すには、むら社会としての多様な生活・生産環境を再生し、自然環境を改善することが求められる。

全町公園化事業も単なる公園整備ではなく、以上のような“むらやまちのコミュニティの豊かさを取り戻す環境改善運動”といった視点の取り組みが求められ、この意味で、エコミュージアムを町の生存基盤にかかわる事業として導入する意義が見い出される。

エコミュージアム“河原・生活まるごと博物館”の背景



河原町における全町公園化のエコミュージアムの手法による具体的な施策展開のテーマを次のように設定した。

ハード面では、町の事業による以下の二つのコア施設のほか、日常的な活動展開の基盤となるサテライト施設を、町内各地にそれぞれの特性に対応し整備する。施設は、空家になっている農家の活用を主体に、町と地域住民の協力により整備し、運営する。

こうした運動の成果が、経済面と精神面を満たす、生きがいのある地域産業と個性ある地域文化を育み、地域の生活・生産環境の改善・再生につながり、域外の知恵とノウハウをもたらす交流環境が活発化する中で、活力あるコミュニティが実現することとなる。

ミュージアム“河原・生活まるごと博物館”の概念図



<コア施設>

○お城山展望台

- 河原町歴史資料館・・手作り手仕事博物館

○因幡国造りの里

- 産業振興センター・・ジゲの手仕事村

「河原・生活まると博物館」の推進拠点であり、総合案内的な情報拠点である。
県東部の地場産業振興と新たな産業起こしの場として機能する施設で、和紙、木工、竹工、陶芸、染織等の工房や体験学習の場、展示販売の場を職種別に配置して、産業振興だけではなく、人材発掘や観光にも魅力ある施設とする。

○整備方針

- ・国道53号河原道路のIC機能を生かした「道の駅」としての施設配置
- ・工業導入地区との関連に留意した施設配置
- ・丘陵地のなだらかな山裾を生かした施設配置
- ・地場産業振興の県東部広域拠点の機能も

○整備概要

- ・物産館（物産の実演、展示、開発、販売）
- ・“河原楽市”・・・農産物の青空市場、イベント広場
- ・ジゲの食賓館

河原の特徴ある「鮎料理」を中心とした和食料理屋

鳥取県の特産「鳥取牛」を用いたステーキハウス

因幡に因んだ和菓子の製造販売の場

県の特徴ある料理“ジゲの味”をPRする資料館

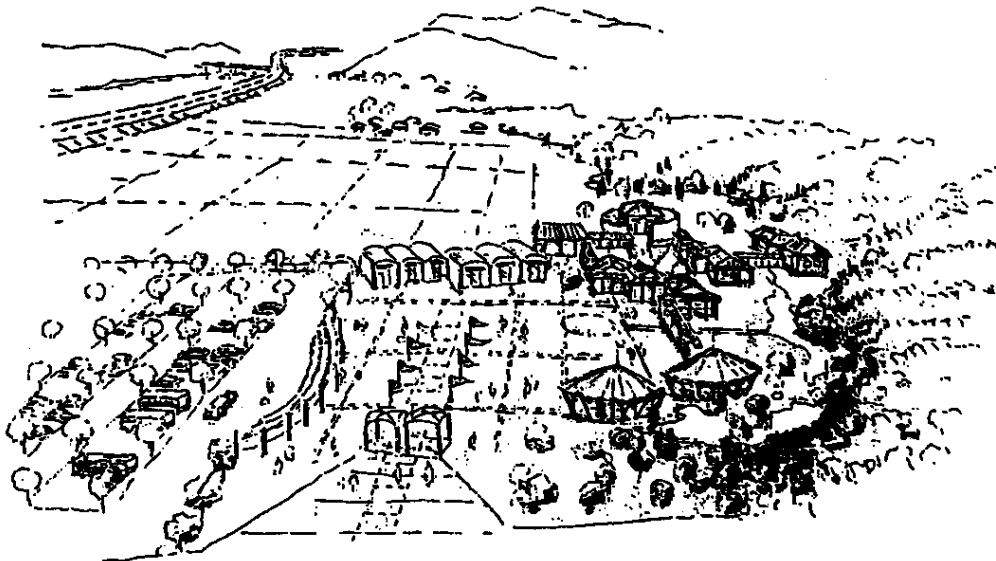
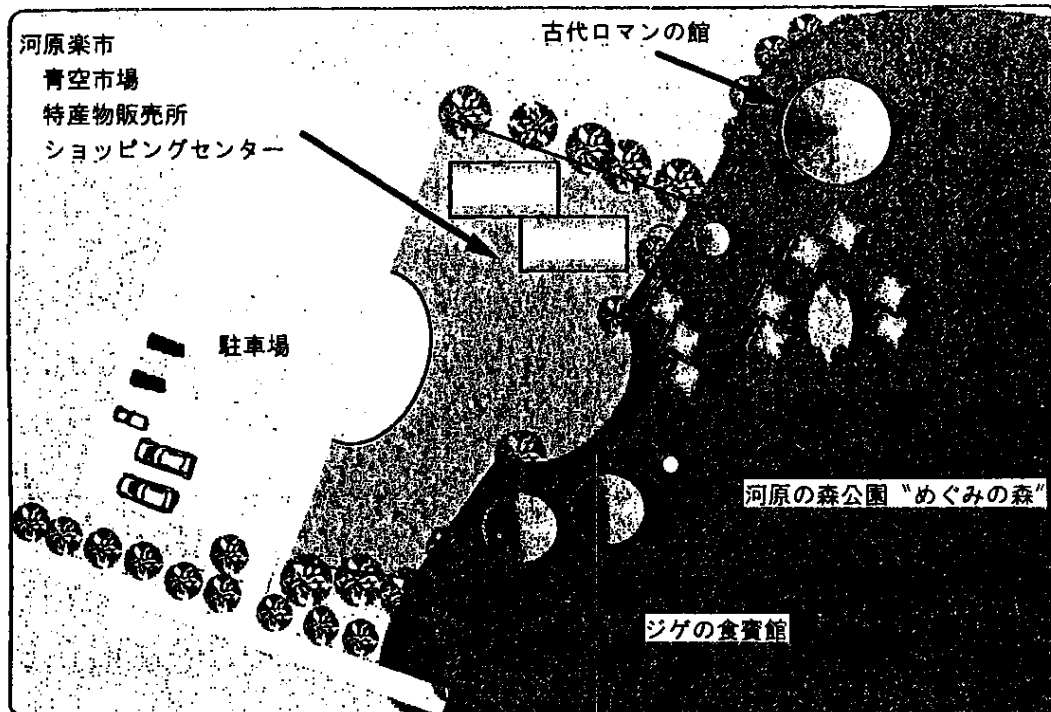
- 「因幡国造り古代ロマンの里」

大国主と八上姫の国造りロマンの伝説や八上郡の豪族「因幡国造」と八上比売の物語等をテーマとした“古代ロマンの館”を整備し、河原町の観光案内と町民文化創造の場としての機能も果たせるような施設とする。

- “めぐみの森”

背後の丘陵地も含め、花や実のなる木を主体とした“めぐみの森”として整備し、上記の各施設を業種・テーマ別に分散配置して、全体が森に包まれた公園的環境とする。

因幡国造りの里



<サテライト施設> ()内は事業主体

空き家になっている農家や民家、醸造元などを活用して施設整備することを基本とする。運営には原則的に地区住民が当たる。

八上姫劇場（人形劇、アニメ）（施設：町、運営：地区）

新民芸のふるさと資料館（牛戸窯元、地区）

紙スキ体験館（地区）

木地師の館（地区）

薬草と染色の館（地区）

牧畜交流館（県、県営牧場内）

沢登りセンター（町）

ハンググライダーセンター（町）

森林資料館（県、「21世紀の森」内）

酒の資料館（醸造元、地区）

柿の資料館（地区、県立柿試験場との連携）

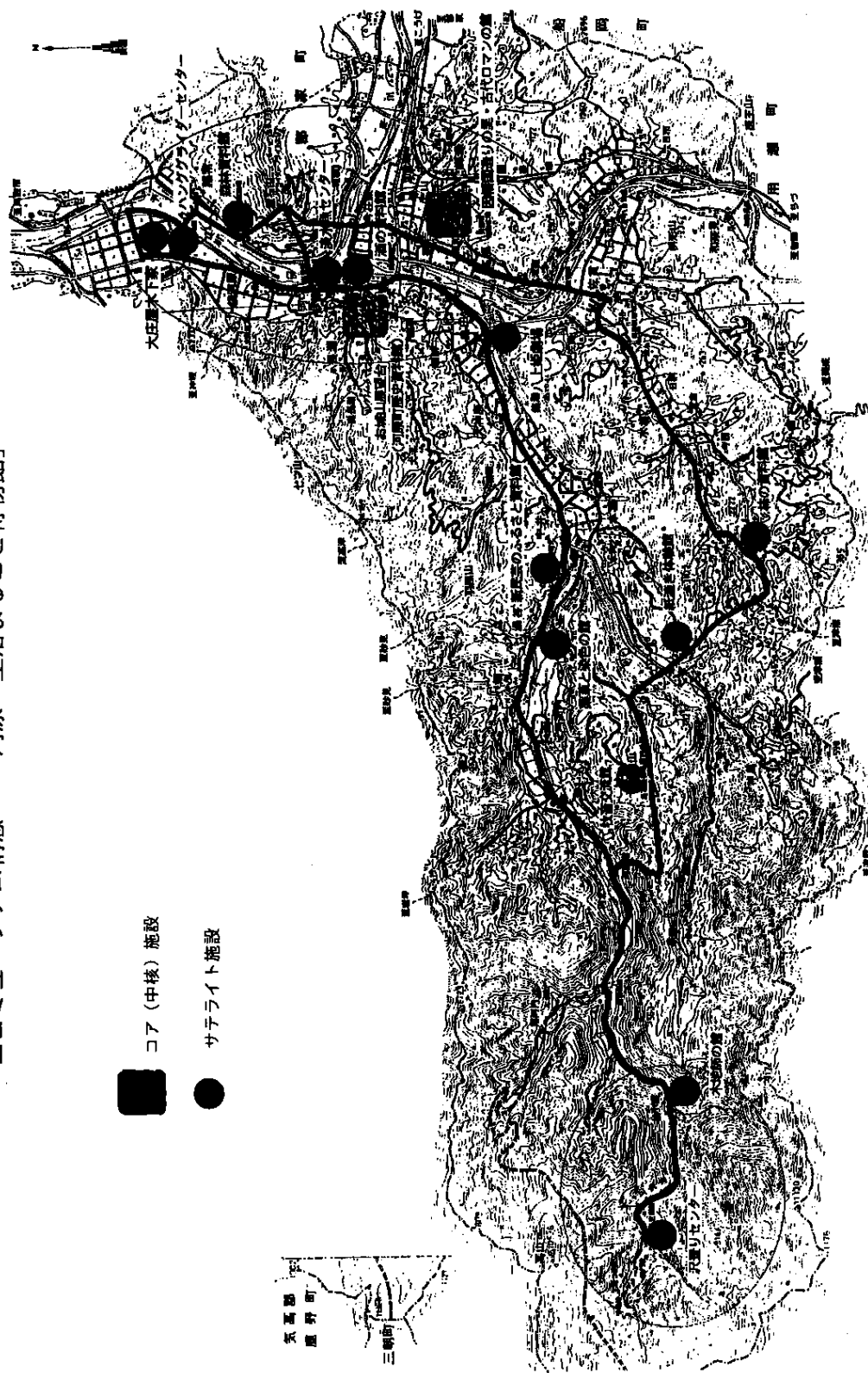
淡水魚資料館（町）

<ディスカバリートレイル>

上記各施設や特徴的な資源を結ぶディスカバリートレイルをテーマ別に4ルート整備する。トレイルはその背景となる風景が重要であり、その意味で、住民の生活の場そのものが問われることになり、町民あがての参加体制の仕組づくりが求められる。

- ・くにづくりの小径——特異な土木遺跡を中心に
- ・いにしえゆかりの小径——歴史的遺産を中心に
- ・ものづくりの小径——手作り手仕事の現場を中心に
- ・水みどりさえずりの小路——特徴的な自然資源を中心に

— エコミュージアム構想 — 「河原・生活まるごと博物館」 —



おわりに

本計画は、「河原町21活性化ビジョン策定調査」の一環として行ったもので、全体の発展方向の理念である“自然と生活と生産が調和し、多面的に展開する21世紀へ新しい生活提案の町”を実現する三つのプロジェクトの一つである。

本計画はまだ基本構想の段階であり、今後全町公園化実施計画の作成とともに具体的な展開が図られるものとみられる。

エコミュージアムのコア施設と位置づけている「お城山展望台」が平成6年度に完成するのを機に、全町的な取り組みが進展することを期待しているところである。